



平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

Report (南部家の本城・聖寿寺館調査の最前線)

1 講演概要

- (1) 日時
2025年11月1日(土) 13:30~15:00
- (2) 場所
タカシン文化センター(平川市文化センター)
- (3) 講演内容
南部家の本城 聖寿寺館調査の最前線
~見えてきた室町・戦国の南部氏~
- (4) 講師
南部町教育委員会 布施 和洋 様
- (5) 主催者
平川市教育委員会(ひらかわ文化財講座)

2 目的

中世における南部氏の歴史的展開を文献史学および考古学的成果に基づいて総合的に検討し、同氏が津軽地方および平川市域において形成した政治・軍事・経済的影響の実態を明らかにするとともに、館・城郭ネットワークを軸とした地域支配構造の中での歴史的役割とその位置付けを解明することである。

3 内容(要約)

(0) はじめに

本講演では、青森県南部町に所在する中世城館「聖寿寺館(しょうじゅじだて)」を中心に、南部氏の歴史的展開と最新の発掘調査成果についてまとめる。聖寿寺館は、南部氏の重要な拠点であったと考えられている城館であり、近年の調査によって、従来の南部氏研究や北東北中世史の理解を見直す重要な遺跡として注目されている。

(1) 南部氏の起源と北東北への進出

南部氏は、現在の青森県南部地方を出自とする一族ではなく、山梨県南部郷をルーツとする武士団である。初代とされる南部光行は源頼朝に従った人物であり、その後、南部氏は北条氏との関係を深めながら勢力を広げていった。しかし、南部氏がいつ糠部(ぬかのぶ)郡へ入部したのか、また誰が最初に北東北へ入ったのかについては、現在も明確には分かっていない。鎌倉時代末期から南北朝期にかけて、南部氏が北東北と関わりを深めていったことは確かであるが、その具体的な過程にはなお検討の余地がある。

(2) 聖寿寺館の時代と特徴

聖寿寺館は、主に15世紀前半から16世紀前半にかけて機能した城館である。江戸時代の記録や出土陶磁器の年代から、1539年の火災によって廃絶したと考えられている。この1539年という廃絶年代が分かっていることは、聖寿寺館の大きな特徴である。なぜなら、出土品がそれ以降のものではなく、1539年以前に使用されていたものと判断できるからである。そのため、聖寿寺館は中世の生活や流通、城館構造を考えるうえで非常に重要な遺跡である。

(3) 根城中心説への再検討

従来、南部氏の中心拠点は八戸の根城であると考えられてきた。しかし近年では、この説に対して再検討が進められている。根城に関する陶磁器の年代を確認すると、南部師行が築城したとされる1330年代の椀や皿が確認されていない。このことから、少なくとも考古学的には、その時期に根城が南部氏の中心拠点として成立していたとは言い切れない。また、根城南部氏に伝わる文書についても、土地の権利を示す文書ではなく、業務命令書のような性格が強いとされる。そのため、根城南部氏が当初から南部氏全体の総領であったという従来の見方には疑問が出されている。その一方で、三戸方面、特に聖寿寺館周辺が南部氏の重要拠点であった可能性が高まっている。





平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

Report (南部家の本城・聖寿寺館調査の最前線)

(4) 聖寿寺館の立地

聖寿寺館は、奥州街道と八戸方面へ向かう街道が交差する交通の要衝に位置している。周辺には平安時代末から鎌倉時代頃の仏像も確認されており、南部氏が拠点置く以前から町場が存在していた可能性がある。つまり、南部氏が聖寿寺館を築いたことで町が生まれたのではなく、もともと人や物が集まる重要地点に南部氏が目を付け、そこに拠点を築いたと考えられる。この立地は、軍事的、経済的に極めて重要であった。



(5) 城館構造と防御性

聖寿寺館の大きな特徴は、**方形館**を意識した構造である。これは室町幕府の将軍邸などに見られる四角い館の形式と関係しており、単なる防御施設ではなく、**権威を示す空間**であったと考えられる。館の周囲には幅15~20メートルほどの大規模な堀が巡らされていた。また、街道は館のすぐ近くを通過していたが、道は意図的に何度も曲げられていた。これにより、敵が直進できず、上方や側面から攻撃を受けやすい構造となっていた。特に南側の入口付近では、クランク状の道、土橋、切通しが組み合わされ、非常に高い防御性を持っていた。

(6) 発掘調査で分かった建物と施設

発掘調査では、建物跡、門、土橋、井戸、堀などが確認されている。建物は時代が進むにつれて大型化しており、最終段階では、主殿、会所、家臣の控え空間、奥向きの空間などに機能分化していたと考えられている。これは、京都の武家屋敷に近い構造であり、**聖寿寺館が高い格式を持つ城館**であったことを示している。また、非常に大きな柱穴や礎石の配置から、**二階建ての建物が存在した可能性**も指摘されている。門には太い栗材が使用され、土橋には版築工法が用いられていたことから、高度な建築・土木技術が導入されていたことが分かる。

(7) 出土品から見る生活と文化

聖寿寺館からは多様な出土品が確認されている。特に注目されるのは、**中国製の青磁、白磁、染付などの貿易陶磁器**である。これらは出土陶磁器全体の約7割を占め、国産陶器よりも中国製品が多い点が大きな特徴である。また、桃、小麦、貝殻なども出土している。貝類は八戸方面から運ばれた可能性があり、聖寿寺館では広域的な物流を背景とした豊かな生活が営まれていたと考えられる。

(8) 日本海交易と浪岡城との関係

陶磁器の量は、南部氏がこの地域に拠点を築いた後に大きく増加している。これは、南部氏にとって津軽方面や日本海交易が非常に重要であったことを示している。特に浪岡城と聖寿寺館では、陶磁器の増加傾向や構成に共通点が見られる。このことから、聖寿寺館は浪岡城を經由して日本海交易に関わっていた可能性がある。北海道の勝山館、浪岡城、聖寿寺館、根城という順に陶磁器の流通量が見られることから、当時の物流ルートを考えるうえでも聖寿寺館は重要な位置を占めていた。





平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

Report (南部家の本城・聖寿寺館調査の最前線)

(9) アイヌ文化との関係

聖寿寺館からは、アイヌ文化と関係する可能性のある資料も出土している。

具体的には、骨角器、ガラス玉、穴を開けた銭貨、熊形の根付けのような資料などである。これらは、南部氏が北海道やアイヌ社会と何らかの交流を持っていた可能性を示している。特に、十三湊攻略後に南部氏が北海道方面との関係を深めた可能性も考えられる。ただし、熊形資料についてはDNA分析が試みられたものの、明確な結果は得られていない。そのため、本州のツキノワグマ由来なのか、北海道のヒグマ由来なのかは不明である。

(10) 考察

聖寿寺館は、単なる地方領主の居館ではなく、政治・軍事・経済・文化の複合的な拠点であったと考えられる。まず、方形館や巨大な堀、格式ある建物構成は、南部氏の権威を示している。

次に、奥州街道と八戸方面の街道が交差する立地は、軍事・物流の両面で重要であった。

さらに、中国陶磁器やアイヌ文化資料の出土は、聖寿寺館が広域的な交易ネットワークに接続していたことを示している。

従来南部氏研究では、根城を中心とする見方が強かったが、聖寿寺館の発掘成果は、三戸方面の重要性を改めて示すものとなっている。

(11) おわりに

聖寿寺館の発掘調査は、南部氏の歴史だけでなく、北東北の中世社会を考えるうえで大きな意味を持っている。この遺跡からは、南部氏の政治的成長、交通の要衝としての役割、日本海交易との関係、さらにはアイヌ文化との交流の可能性まで、多くのことが明らかになりつつある。今後さらに調査が進めば、聖寿寺館は南部氏研究の中心的遺跡として、従来の歴史像を大きく更新していくと考えられる。

3 内容(要約)

本講演を通じて、南部氏の歴史的展開とその拠点である聖寿寺館の実態について理解を深めることができた。特に印象的であったのは、従来の文献中心の歴史像とは異なり、考古学的成果によって中世の地域支配構造が具体的に復元されつつある点である。

従来、南部氏の北奥進出や拠点の所在については、後世の編纂史料に依拠した理解が主流であったが、本講演では、出土遺物や遺構の分析を通じて、その実態が再検討されていることが示された。とりわけ聖寿寺館については、単なる居館ではなく、広域的な交通路の結節点に位置し、政治・軍事のみならず経済・文化の中核拠点として機能していた可能性が高い点が明らかとなり、中世北奥地域における拠点のあり方を再認識する契機となった。

また、館の構造や配置が中央政権の影響を受けた「方形居館」であることは、南部氏が単なる在地勢力ではなく、室町幕府的秩序の中に組み込まれた存在であったことを示唆しており、地方と中央の関係性を考える上でも重要な視点であると感じた。

さらに、陶磁器やアイヌ文化系遺物の出土からは、日本海交易や北方交易との関わりが見えてくる点も興味深い。これにより、南部氏の活動は単なる地域支配にとどまらず、広域的な流通ネットワークの中に位置付けられるべきものであると理解できた。

一方で、南部氏の初期拠点や津軽地方への影響の具体像については、依然として未解明の部分も多く、文献と考古資料の乖離をどのように統合するかが今後の課題であると感じた。特に、津軽・平川市域における館群や城郭との関係性をより精緻に検討することで、地域支配の実態がさらに明らかになると考えられる。

以上より、本レポートは南部氏と聖寿寺館の歴史的意義を再評価する上で重要な知見を提供するものであり、中世北奥地域史の理解を一層深化させるものであった。

今後は、こうした研究成果を地域史教育や文化資源の活用へとどのように接続していくかが求められるであろう。



平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

■ Report (南部家の本城・聖寿寺館調査の最前線)

【追補1】平川市を中心とした津軽地方の位置づけ

(1) 津軽地方の政治勢力 (安東氏)

南部氏が進出する以前、津軽地方は安東(安藤)氏が支配していた地域である。

安東氏は、日本海交易を基盤とした有力勢力であり、その拠点は十三湊(とさみなと)にあった。この十三湊は、当時の日本における最大級の国際貿易港の一つであり、中国(明)、朝鮮、北方(蝦夷・アイヌ)との交易が行われていた。つまり、津軽地方は単なる地方ではなく、東アジア交易の窓口であった。

(2) 平川市周辺の地理的重要性

現在の平川市周辺は、津軽平野の南東部に位置し、津軽平野(農業生産)、山地(資源・交通障害)、内陸交通の結節点という特徴を持つ。特に重要なのは、津軽と南部をつなぐ通路に位置する点である。南部氏が津軽へ進出するためには、八甲田山系の越境、内陸交通の確保が不可欠であり、その中間的な拠点として、平川流域は戦略的価値を持っていた。

(3) 浪岡城と津軽支配

津軽地方における内陸拠点として重要なのが浪岡城である。

浪岡城は、日本海交易(十三湊)と内陸を結ぶ拠点、南部勢力進出後の支配拠点として機能した。講演でも示された通り、聖寿寺館と浪岡城の陶磁器構成が類似していることから、両者が同一の流通ネットワーク(日本海ルート)に属していた可能性が高い。これは、単なる交易ではなく、南部氏が津軽の流通構造を取り込んだことを意味する。

(4) 津軽侵攻と物流の変化

南部氏が津軽へ進出する以前、交易の中心は完全に日本海側にあった。しかし、十三湊の衰退、南部氏の進出により、物流構造は変化する。

講演データでも示されている通り、南部拠点(聖寿寺館)の陶磁器量が急増、津軽側拠点(浪岡城)と連動している。これは、津軽の交易ネットワークが南部側に取り込まれたことを示している。

(5) 平川市の歴史的意味

平川市周辺は、単独で大城郭がある地域ではないが、以下の意味で重要である。

①境界領域

津軽と南部の「接点」であり、勢力の移動・衝突が起きる地域

②交通の中継地

日本海側(十三湊)→内陸(浪岡・平川)→太平洋側(三戸・八戸)をつなぐルート上に位置

③経済圏の接続点

農業生産地(津軽平野)と武士政権(南部氏)を結ぶ役割

(6) アイヌ交易との関係

津軽地方は、アイヌとの交易においても重要な位置を占めていた。

・日本海側 → 北海道 ルート

・津軽 → 内陸 → 南部 ルート

というルートの中で、津軽は「中継拠点」であった。

聖寿寺館から出土したアイヌ系資料は、津軽を経由した可能性が極めて高いと考えられる。

(7) 結論

以上を踏まえると、津軽地方(特に平川市周辺)は、南部氏視点では物流を確保するための戦略地域であり、津軽側視点では日本海交易を支える内陸拠点という二重の意味を持つ。

そして最も重要なのは、聖寿寺館の発展は、津軽の経済力を取り込んだ結果であるという点である。すなわち、聖寿寺館の発展は、南部氏単独の政治・軍事力によるものではなく、津軽地方の持つ交易ネットワーク、とりわけ十三湊を中心とした日本海交易圏を取り込んだ結果と考えられる。

その中で平川市周辺は、津軽と南部を結ぶ交通・経済の接点として重要な役割を果たしており、地域史の中で再評価されるべき位置にあると考える。



平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

Report (南部家の本城・聖寿寺館調査の最前線)

【追補2】南部氏の拠点と「館」からみる津軽・平川市の中世構造（1）

1 はじめに

本講演は、南部町の聖寿寺館跡の発掘調査成果を中心に、南部氏の北東北進出と中世拠点構造を明らかにするものであった。特に、従来の文献中心の歴史像に対し、考古学的成果から新たな理解が提示された点に大きな意義がある。また本レポートでは、この講演内容を踏まえ、平川市を中心とした津軽地方の「館」分布や大光寺城の位置付けを関連づけながら考察する。

2 南部氏の北東北進出と拠点形成

南部氏は、清和源氏の流れを汲み、もとは甲斐国南部郷（現在の山梨県）を本拠とした武士団である。その後、鎌倉幕府との関係を背景に北東北へ進出したと考えられるが、具体的な時期や最初の拠点については未だ不明な点が多い。

従来は八戸の根城が初期拠点とされてきたが、講演では考古学的検討により、14世紀前半の遺物が存在しないことや、陶磁器の年代が後世に集中することから、根城初期拠点説には再検討の余地があるとされた。

3 聖寿寺館の性格と意義。

(1) 立地の特徴

聖寿寺館は、欧州街道と枝道の結節点、河川沿い、岩手県境に近い交通の要衝に位置している。これは偶然ではなく、人と物が集まる地点を意図的に選んだ拠点であると考えられる。

(2) 「館」としての構造

聖寿寺館は、約200m規模の方形区画、大規模な堀、曲がりくねった街道（防御構造）、主殿・会所・庭園空間を備える。これは単なる居住空間ではなく、政治・儀礼・防御を兼ね備えた「権力空間」である。

(3) 都市との関係

講演では特に重要な指摘として、館の周囲にはすでに町場が存在していたことが示された。仏像や観音堂の存在から、平安末期からの集落街道結節点としての機能が推定され、館が町を作ったのではなく、町に館が置かれたという構造が明らかとなった。

4 館と城の関係

講演を通じて見える重要な視点は、館と城は連続した存在であるという点である。

館は居住・政治中心、城は防御・軍事中心であるが、聖寿寺館のように堀、門、クランク状道路を備える館は、すでに城的機能を持つ「城館」である。つまり中世は、館 → 城へ発展する過程の時代であった。

5 交易と広域ネットワーク

発掘調査では、中国陶磁器（約7割）日本海側由来の物資、アイヌ文化の遺物が出土している。これは、聖寿寺館が広域交易ネットワークに組み込まれていたことを示す。特に、浪岡城、十三湊、北海道（アイヌ圏）との関係が強く、日本海交易ルートの中継拠点であった可能性が高い。

6 平川市と「館」分布の意味

平川市周辺には、大光寺城、新館、古館、館田、岩館、五日市館などの地名が多く存在する。これは、中世に小規模な武士拠点（館）が密集していた地域であることを意味する。この構造は、強い中央支配ではなく、地域ごとの在地勢力が分立する分権的社会を示している。

項目	館	城
主目的	生活・政治・儀礼	防御・戦闘・軍事
場所	平地・集落近くに多い	山・丘・要害地にも多い
利用	日常的に使う	戦時利用が中心の場合もある
建物	主殿・会所・庭など	櫓・曲輪・土塁・堀など
性格	領主の居館	軍事拠点
象徴性	権威・格式	防御力・支配力

図 館と城の主な違い



平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

Report (南部家の本城・聖寿寺館調査の最前線)

【追補2】南部氏の拠点と「館」からみる津軽・平川市の中世構造（2）

7 大光寺城の位置付け

大光寺城は、この館ネットワークの中で、津軽と南部を結ぶ中間地点、交通・物流の結節点、境界防衛拠点として機能した。つまり、館群を統合する中核的城郭であり、聖寿寺館や浪岡城と並ぶ地域支配の要であった。

8 津軽地方の歴史構造

以上を踏まえると、津軽地方の中世は次のように整理できる。

- | |
|----------------------|
| ① 小規模館の分散 |
| ② 交通結節点への拠点集中 |
| ③ 有力勢力（南部・後の津軽）による統合 |
| ④ 城郭化の進展 |

平川市はこの中でも、①～③の過程が特に色濃く残る地域である。

9 結論

本講演から明らかとなったのは、中世の拠点は「城」ではなく「館」から始まるという点である。そして、館は生活・政治・儀礼の場であり、城は防衛・軍事の場でありながら、両者は連続的に発展し、地域支配の構造を形成していったといえる（◆）。

平川市に多く残る「館」地名は、その過程そのものを示す歴史的証拠であり、今後の地域史・観光・まちづくりにおいても重要な資源となる。

10 まとめ

- ・聖寿寺館は交通・交易の結節点に立地した権力拠点
- ・館は城の前段階であり、両者は連続する存在
- ・平川市は館が密集する分権的中世社会の典型地域
- ・大光寺城は館群を統合する中核拠点
- ・津軽地方は館ネットワークから城郭支配へ発展した地域

◆ポイント：「館」から「城」への発展の流れ

> 館（たて・やかた）とは何か

館は、主に武士や有力者の居住・政治拠点です。つまり、住む場所であり、支配する場所です。館には次のような役割がありました。

- | | | |
|----------|-------------|---------------|
| ・領主の住まい | ・家臣が集まる場所 | ・年貢や物資を管理する場所 |
| ・客を迎える場所 | ・儀式や宴会を行う場所 | ・必要に応じて防衛する場所 |

聖寿寺館のように、主殿・会所・庭・堀・門を備えた館は、単なる家ではなく、権力を示す空間でした。

> 館から城への発展の流れ

中世では、次のような流れがよく見られます。

館 → 防御強化 → 城館 → 城

最初は領主の館だったものが、争いが激しくなるにつれて、堀を深くする、土塁を高くする、曲輪を増やす、山や丘に拠点を移すことで、城郭化していきました。



平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

■ Report (南部家の本城・聖寿寺館調査の最前線)

平川市における中世遺跡活用と地域振興に関する政策提言(1) —「館ネットワーク」と大光寺城を核とした歴史資源活用戦略—

1 はじめに(目的)

本提言は、平川市に多数存在する「館」関連遺跡および大光寺城跡を中心とした歴史資源を活用し、以下のことを実現するための具体的方策を示すものである。

- ① 地域アイデンティティの確立 ② 観光振興 ③ 教育・人材育成 ④ 持続可能な地域づくり

2 現状と課題

(1) 歴史資源のポテンシャル

平川市は、館地名が多数存在し、大光寺城という拠点城郭を有し、津軽と南部の境界地域という特徴を持つ。これは全国的にも希少な **中世分権構造が可視化できる地域** である。

(2) 課題

しかし現状では、以下の課題がある。

- ① 認知度が低い ② 遺跡の可視化不足 ③ ストーリー化の欠如 ④ 観光資源として未統合

3 基本戦略

本提言の中核は、 **館ネットワーク+大光寺城** を一体的に活用することである。

(コンセプト) **館のまち平川 — 中世武士のネットワーク社会を体験する地域**

4 具体的政策提言

(1) 歴史のストーリー化とブランド化

提言①：公式ストーリーの構築

①館の分散(在地武士)→②大光寺城による統合→③津軽・南部の境界抗争→近世への移行
以上の流れを軸とする。

■「分散から統合へ」の歴史

効果：教育・観光の両立、他地域との差別化

(2) 遺跡の「見える化」

提言②：館跡の可視化整備

・土塁・堀の復元表示 ・AR・VR導入 ・案内板の統一整備

提言③：モデル館の整備

・1か所を重点整備：・平面復元 ・建物想定表示 ・生活再現展示

■「実感できる遺跡」へ

(3) 大光寺城の中核化

提言④：広域拠点として再位置付け

・大光寺城を学習拠点、観光拠点、情報発信拠点として整備
・具体策：・ガイダンス施設設置 ・津軽南部史の展示 ・発掘成果の公開



平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！



市政報告はこちらを
ご参照下さい ▶

Report (南部家の本城・聖寿寺館調査の最前線)

平川市における中世遺跡活用と地域振興に関する政策提言(2) —「館ネットワーク」と大光寺城を核とした歴史資源活用戦略—

(4) 「館ネットワーク観光」の創出

提言⑤：回遊型観光ルート

・例：・館跡群 ・大光寺城 ・浪岡城 ・周辺街道

■「線」でつなぐ観光

提言⑥：テーマ別ルート

・武士の暮らしコース ・戦いの防御構造コース ・交易・物流コース

(5) 教育・人材育成

提言⑦：学校教育との連携

・郷土史教材の開発 ・フィールドワーク実施 ・子どもガイド育成

提言⑧：市民参加型研究

・発掘体験 ・講座 ・市民研究員制度

(6) デジタル活用

提言⑨：デジタルアーカイブ

・館分布マップ ・3D復元 ・出土品公開

提言⑩：観光アプリ

・GPS連動解説 ・AR再現 ・スタンプラリー

(7) 広域連携

提言⑪：津軽・南部連携

・南部町(聖寿寺館) ・八戸(根城) ・浪岡城

■北東北の中世ネットワーク形成

5 期待される効果

(1) 地域アイデンティティの確立 → 「館のまち」という明確な特徴

(2) 観光振興 → 滞在型・回遊型観光

(3) 教育効果 → 郷土理解の深化

(4) 経済効果 → 地域消費・交流人口増加

6 実施ステップ

(1) 短期(1~3年) → ・調査整理 ・ストーリー構築 ・案内板整備

(2) 中期(3~5年) → ・拠点整備 ・観光ルート形成 ・教育連携

(3) 長期(5年以上) → ・広域連携 ・ブランド確立 ・国史跡化/文化財指定推進

7 結論

平川市は、館が集中する極めて稀な地域であり、日本中世史を体感できる潜在力を持つ地域である。したがって、館ネットワークと大光寺城を核とした戦略的活用により、歴史・観光・教育を統合した地域振興が可能である。